

日本語普及会構造図(北部編)

ハノイ日本文化會館 (1943年11月開館)

北部仏印日本語普及会

北部仏領インドシナに日本文化を紹介する一元的機関として1943年4月にハノイで開館された。本部をハノイ、支部をハイフォン、フエにそれぞれ設置して、北部仏印における日本語学校の経営、日本語教員の指導連絡、また日本語教育に関係ある印刷物その他資料の作成・頒布など直接日本語普及事業を実施している。会長には、帝国特派大使府情報部長小川総領事が当たられている。本会は、北部仏印における一元的日本語普及機関であると共に、内地にある日本語教育振興会と十分の連絡を保ち北部仏印における同会の支部的職務をも行うことになっている。

ハノイ

夜間教授

「ピエ、パスキエー」小学校
 【教授時間】1週3時間
 【生徒総数】710名
 (1943年4月現在)
 【教師数】4名
 【学級数】12学級
 1期生:120名
 2期生:400名
 3期生:130名
 4期生:60名

昼間教授

「チャン、チョン、ユエ」小学校
 【教授時間】1週3時間
 【生徒総数】186名
 (全て1期生)
 (1943年4月現在)
 【教師数】4名

華僑に対する教育

広東人を主とするもの

中華中学を無償にて借り受け、毎日夜間7時半より8時半まで授業。
 【生徒数】114名
 1期生:35名
 2期生:34名
 3期生:30名
 4期生:15名

福建人を主とするもの

福建学校を無償にて借り受け1週3時間(月水金)夜間授業
 【生徒数】10名

学校教育に

おける正課
 既設の華僑学校においては正課として日本語を教授している
 【福建小学校】
 5・6年生に対し、毎日1時間
 【中華中学】
 上級生約40人に対し、1週2時間

ハノイ大学における日本語講座

「ハノイ」大学

昭和17年初め頃、仏印当局は仏印関係及び軍渉関係に日本語を習得させることの必要性を痛感した結果、元第三高等学校教師原国籍ロシア人「プレトネル」氏を日本より招聘して、仏印政府内に日本語講座を開設。一般的にその要求が強くなっていったため、ハノイ大学に日本語講座を設けて一般に開放した。現在、聴講者は、当初約200名だったが、減少して60名ぐらいになっている。

仏印当局は「プレトネル」氏を講師として主としてベトナム人官吏のための講座を設けて第一学年、第二学年各2、30名の聴講生を収容教育している。

また、仏印当局は必要性に迫られて、1942年3月14日に法令により、日本語をハノイ大学入学資格試験選択科目の中に付加し、また小学校中学校においても将来希望者増加すれば正規の科目として学科目の中に編成する用意をすることになっている。

【教授要綱】

普及会に於いては、日本語教育の過程を便宜上四期(各三ヶ月)に分けて次の要領を持って教授している。

第1期 「ローマ字」を用いて正しい発音を教授し、「カタカナ」を用いて「ハナシコトバ」の教授を主眼とし、更に日本語の基礎文型を知らしめる。【国際学友会編纂「日本語教科書」基礎編】

第2期 ひらがなを用い、教材として前記「日本語教科書」巻一中より適宜選択する。

第3期&第4期 それぞれ前記「日本語教科書」巻二、巻三中より教材を選択して教授する。

華僑に対する日本語教授の教材としては、大出正篤氏の「効果的速成式標準日本語読本」の内より適当なものを選択して使用している。

ハイフォン

1 ベトナム人に対する教育

従来、ハイフォン日本人会が主催して日本語講習会を設け、その生徒約200名位をA,B,C級にわけ教育していた。ハイフォンにも日本語普及会の支部が置かれることになり、運営が日本人会経営から普及会に委託された。これを正式な日本語学校とするよう仏印当局と折衝中である。

2 華僑に対する教育

日本語講習会

中華総商會が開設し、初等科と中等科とに別れ、期間は各3ヶ月、その生徒数は70名、教師は3名(日本人1名、中国人2名)である。

華僑中学校

本年4月より従来の英語を廃止し之に代ふるに日本語を以てした。その授業は1週10時間、教科書は維新政府編纂の日本語教科書を使用している。

フエ

北部日本語普及会フエ支部設置に伴い、帝国領事館指導の下に新たに華僑学校を借り受け先般日本語学校を開設する運びに至った。

この表は、関野房夫(1943)「秦国及び仏領印度支那における日本語教育の現状 2」『日本語』日本語教育振興会第3巻9号、pp.40-49及び「彙報」(1944)『日本語』日本語教育振興会第4巻5号、p.31より作成

日本語普及会構造図(南部編)

サイゴン日本文化会館(1944年2月11日開館)

南部仏印日本語普及会

南部仏印日本語普及会も同様に1943年4月に創立された。本部をサイゴンにおき、支部を「シヨロン(現在のチョロン地区)」「ブノンペン」に設置して、南部仏印における日本語普及の中核的機関であった。こちらのほうは北部と異なり、直接日本語学校を経営するのではなく、各日本語学校の指導連絡を主とし、日本語教員の指導、日本語教育に必要な資料の作成・頒布などを行い、一つの日本語学校では実施できない事業などを行うことになっていた。

サイゴン

シヨロン(現在のチョロン地区)

<p>「シヤスル・ローバ」日本語講習会</p> <p>開講:1942年3月27日 教師:1名(日本人) 生徒:上級(30名) 下級(70名) 教科書:日本語教育振興会刊行『日本語読本』巻一、二、その他 授業時間:1週三時間(ただし、警察官クラスは1週二時間) 仏印教育局の開設したもので、生徒はフランス、ベトナム人官吏を主としている</p>	<p>西貢日本語学校</p> <p>開校:1942年5月1日 教師:6名(日本人) 生徒:高等科 55名 中等科 51名 初等科 121名(二級に分ける) 教科書:教師作成のプリント 授業時間:1週三時間 本校生徒は、小学校卒業程度のベトナム人商店員、職工などで平均22歳である</p>	<p>「ベルラン」日本語学校(仮称)</p> <p>開校:1943年3月18日 教師:1名(日本人) 生徒:20名 教科書:教科書としては無いが、「ヴァカリー」著「日本語会話」を教師参考書としている 授業時間:土、日を除き、毎日二時間 本校の生徒は、大南会社のベトナム人男子使用人で平均年齢22歳である</p>	<p>貿易統制会内日本語学校</p> <p>開校:1943年3月30日 教師:2名(日本人) 生徒:20名 教科書:適宜作成 授業時間:1週2時間 本校生徒は、邦人商社使用人で平均25歳である。近く、校舎移転を機として生徒数を二百名程度に拡大する予定である。</p>	<p>南洋学院附属日本語学校</p> <p>開校:1943年5月1日 教師:4名(日本人) 生徒:180名 教科書:南洋協会編纂日本語教科書 授業時間:1週3時間</p>	<p>英士日本語学校</p> <p>開校:1942年2月 教師:4名(内日本人1名、中国人3名) 生徒:初等班36名 高等班23名 教科書:日本語教育振興会刊行「ハナシコトバ」(上・中・下)同日本語読本(巻一)及び同校教師編纂の「日語講義」「日語初等編」 授業時間:1週三時間 本校の生徒は主として、華僑の中商人の子弟及び本邦商社使用人でその平均年齢22歳である</p>	<p>南折日語学校</p> <p>開校:1942年10月 教師:1名(中国人) 1943年、三月末より休校している</p>	<p>共栄日語学院</p> <p>開校:1943年1月5日 教師:3名(日本人) 生徒:323名(6学級) 教科書:台湾発行の『簡易国語読本』巻一、巻二、同『日本語教科書』巻一、二、三、四 教授時間:各級1週12時間 生徒の職業は、商業:62% 学生:20% 農業:6% その他:12%</p>
---	--	--	--	---	--	--	--

プノンペン

プノンペン日本語講習会

名称: プノンペン日本語講習会

場所: プノンペン市シソワット高等中学内

期日: 1943年10月11日より3ヶ月

生徒: 100名(ベトナム人70名、東支人30名、内女10名)

- * 生徒の教育程度は、大体中等学校卒業以上、仏国留学商学博士、学士その他一般官吏商社使用人など当地方における現地人側の知識層多く集まる。
- * 当地方における日本語熱は地理的状況、在留邦人の数或いは、現地仏当局の施設などの原因から、ハノイ、サイゴン方面より若干遅延して出現し始めたように見受けられたが、一般現地人の中には独学で相当程度の学習をしてきたものもあり、昨秋あたりから一般の日本語学習熱が急速に上昇し、サイゴンにわざわざ出かけていく者まででてきたので、講習会を開くことになったものである。